

日本語に混用された渡来語

柳 尚 熙

序言

1. 渡来人と渡来語

- (1) 渡来人と帰化人の歴史
- (2) 飛鳥時代と百済
- (3) 白村江戦争と日本援軍
- (4) 天智天皇と亡命渡来人
- (5) 吏読と片仮名
- (6) 郷歌と日本最古の文献『万葉集』

2. 17世紀江戸時代の日本人の朝鮮語研究

- (1) 新井白石の朝鮮語研究

- (2) 『東雅』の語源研究

- (3) 雨森芳州の朝鮮語研究

- (4) 『交隣須知』一朝鮮語の会話入門書

- (5) 『全一道人』一朝鮮語の学習書

結言

日本における韓国関連地名

参考文献

序 言

日本と韓国はまさに「一衣帯水」の関係にある。昔、海流や潮流に乗っていろいろな人たちが日本に渡来している。渡来の波は旧石器時代にも確認されているが、いろいろ研究が進むに従い大陸、特に、韓国からの渡来人が多かったことが分かってきた。

韓国は地理的に見て最も近い隣接国であり、韓国から日本に渡るのを韓国側から見れば「渡海」となるが、日本側から見れば「渡来」となる。そこで、ここでは「渡来（人）」の方を使うことにする。その渡来人が持っていた言葉が現在もそのまま使われている。これを「渡来語」とし、この「渡来語」について論述する。

日本語に変化し混用されて使われている渡来語を調べると、この渡来人たちの優れた頭脳や技術で吏読や口訣式の漢字借用法を応用、あるいは利用して日本文字の「片仮名」をつくったのではないか。また、郷歌式（郷札）の万葉仮名が和歌表記によって「万葉集」を編み出したのではないかと考えられる。

1 渡来人と渡来語

(1) 渡来人と帰化人の歴史

『日本書記』に記録されている「帰化」の意味は、日本に徳をもたらし、その中に融合することとなっている。これは古代も現代も変わっていない。しかし、古代から現代に至るまで大陸から日本に渡って来た多くの人たちは日本書記でいう「帰化人」ではなく「渡来人」だといえる。

彼らは帰化とは全く関係はないが、先進文明の伝達者であり、開拓者であり、協力者だったのではないかと思われる。彼等が持って来たものは生活道具だけでなく、先進的な思考方式まで持って来たことは間違いない。

そこで、私は渡来氏族が言語文字まで一緒に持って来たと考えて「渡来語」と命名し、その渡来語について考察することにする。

渡来人は仏教、儒教のみならず道教の伝来をも促進する媒体となり、あわせて新知識や新技術を日本列島に伝えた（渡来人と古代日本（819）上田正昭）。

その渡来人たちが押寄せたのは西暦前三世紀から西暦後三世紀までの弥生文化期が第一波群、五世紀の応神・仁徳天皇時が第二波群、五世紀後半から六世紀はじめの雄略・欽明天皇時が第三波群で、七世紀後半の天智天皇時の第四波群に一番多くの百済人が亡命し日本に押し寄せて来ることになった。これが七世紀までの渡来人だといえる。

この渡来人たちが持ってきて使っていた言葉が今でも使われている。少し例を挙げると、子供を叱りつけるときや懲らしめるとき父母が使う言葉に「メ(mæ)スル」という言葉がある。これは「ムチ」、「棒切れ」「叩く」という意味で（「ムチをする」）である。

今も韓国語で「매(mæ)」とつかっている。

「オマル（便器）」の「オ」は御の意味で接頭語、「マル」は幼児のオシッコをするという表現で「マル」容器を意味する。（말(マル) 月印釈譜1:26)

「ハナ（ひとつ、第一の意味）」、また、一つを表す数詞である。ショッパナ（初

十ハナ)、ハナ酒のハナははじめに汲んだ酒、あるいはハナ(最初)という意味。

複数の人が同時に行動を起こす時に「一、二、の三」とか「セーノ」と掛け声をかけるが、この「セーノ」は韓国語の「三、四」(セッ、ネッの数詞)でやはり掛け声に使われる。

「ドンチョウ(緞帳)」は劇場などの懸垂幕をいう。これは高句麗の僧侶である曇徴(ドンチョウ)から来た言葉で、曇徴は奈良法隆寺の壁画を描き、彩色画、紙、墨、白の製法を伝えたと記録されている(610年)。ドンチョウ芝居は位が低い演劇のことで、漢字は当て字である。

「オシッコ」は(「シィ」をする子)で幼児がおしっこをするという意味で「オ」は接頭語の御である。韓国でも同じく「シィ」とつかう。

「パッチ(ももひき)」は「パジ」という韓国語のズボンから来た言葉である。

「オモウサマ(母様)」は宮で母親の尊称であるが、韓国語では母屋にいる人の意味(オモニ)母方である。

釜「かま」は韓国の「カマ(kama)」と一致する。衣「ころも(許呂母)」は上着のつけひもをいう。韓国語の語義「コロム(kolom)」と思われる。

「おすひ(遊須比)」は韓国語の頭からかぶる衣類オッヒ(os-h)」と一致する。

踊「おどり(乎杼利)」はぐるぐるまわる(廻、還、周)の意味で「ドル・トリ」をいう。赤ん坊に頭(カブリ)を振らせてあやす語でもつかう。

万葉集で二・五を「ト・オ」と読んでいるが、韓国語で「ト」は「二」の冠形数詞、「オ」は「五」の数詞で「十」を表す。

「アスカ(飛鳥)」は明日が来たか(あしたになったか)の意味で「夜が明けた」かの意味でつかうが、韓国語で「飛(ナル)」と「鳥(セ)」に訓読みする。「ナル」は「日」の意味で「セ」は「鳥」の意味でもある。

「サスミ(鹿見)」は対馬の地名であるが「サスム」(사슴)は韓国語で「鹿」のことを言う。

「ゾクゾク」は寒さなどが身にしみる時につかうが、韓国語では「ソクソク」(속속) 続々、どんどん、内、中、心中、等の意味でつかう。

4 日本語に混用された渡来語

「コイコク（鯉汁）」は鯉の味噌汁の意味で、「コック」（𪛇）は韓国語でスープのこと。傀儡は「くぐつ（あやつり人形）」という。韓国語で「コクト（kok-to）」という。

愚は「おろ（於呂）」という。韓国語の「オリ（幼い）」と同じである。

(2) 飛鳥時代と百済

『万葉集』には「飛鳥（アスカ）」や「明日香（アスカ）」と表現される箇所が出てくる。明日香の例が37箇所、地名や川の名前や歌に「アスカ」という言葉が46例ある。飛鳥の用例は7例だけで、阿須可、安須可の表現がそれぞれ1例ある。「飛ぶ鳥」の飛鳥の用例が3箇所（78, 194, 196）、「明日香川」や「明日」という用例は2箇所（198, 2701）ある。これらはいずれも渡来人と関係がある地名である。

平安時代に書かれたという『新撰姓氏録』を見ると、漢（アヤ）系11氏族、百済系6氏族、高句麗系6氏族、任那系2氏族、新羅系1氏族の計26氏族の渡来系氏族が飛鳥を中心に今来郡（イマキコオリ）、現在の高市郡と橿原市の一部で暮らしたと伝えられている。

今来（今木）郡というのは、今度、新しく来た外国人が暮らしている郡（コオリ）という意味である。高市郡の8割から9割の人たちが渡来系だという。渡来人は畿内、特に、大和、飛鳥地方に多かったということが分かる。

大阪田原本町の弥生文化遺跡の唐古（カラコ）にある唐古池は、百済人すなわち韓人（カラビト）が掘った池だということから韓子池（唐子池）と名前をつけたのである（『日本書紀』応神紀7年）。奈良法隆寺金堂壁画も高句麗の僧曇徴が描いたという。曇徴は五経にも通じており、彩色、紙、墨の製法も伝え彩色画に長じていたという。前述したように劇場の舞台に下がっている幕を「^{ドンチョウ}緞帳」というのは「^{ドンチョウ}曇徴」からの借字で発音が同じである。

『日本書紀』に新羅の国名が433カ所出て来るが、その中に地域名として韓（カラ）の名前が3箇所、百済の国名が407箇所、高麗（高句麗を意味する）と明記してあるのが188箇所、任那が143箇所、加羅が35箇所も記録されている。

『日本書紀』は天武朝（672～686）から編纂が計画され 691 年には貴族の家伝を収集し、720 年に日本初の正史として編纂が完了したが、これには『百済記』、『百済新選』、『百済本記』の百済三書が記録されている。

595年推古天皇3年に蘇我馬子の招きで百済から慧聰僧^{エソウ}が日本に来ることになった。同じ年に来た高句麗の僧慧慈^{エジ}と力を合わせ聖徳太子の仏教の師として飛鳥寺を中心に日本仏教を発展させた。慧慈は聖徳太子の政治外交の顧問となり20年余り側近として日本に留っていた。彼らは飛鳥寺で暮らしながら飛鳥寺の建立にも深く関わることになる。

(3) 白村江戦争と日本援軍

「白村江」を日本では「ハクスキノエ」と表現する。この江（川）は白馬江をいい、錦江、熊津江もその一部である。中国の文献には「白江」と表記されたようだ。日本では663年の白村江戦争として知られている。

百済の義慈王は新羅の土城を占領した。新羅はその翌年の648年に唐国に救援軍を要請した。その使者になった王族の金春秋は有事に唐国が出兵してくれるように頼み、唐国がこれを受入れ、唐と一緒に戦うための唐服着用の権限を得た。これを今風にいえば、唐羅親善（唐と新羅）の安保条約の成立のようなものである。

唐国の太宗は金春秋（新羅）の要請を受入れ百済の義慈王に占領地を新羅に返すよう命令し、もしこれに応じなければ唐国と新羅は連合して決戦に臨むと脅迫してきた。

本来、百済は上代から日本との関係が続いており、欽明天皇時代に百済聖王（日本では聖明王）が仏教を公伝してきたと記録されている（538年、欽明天皇13年に仏教伝来）。百済の聖王は北の高句麗と東の新羅の攻勢に耐えられなくなり熊津城から西南の泗比城に移り、国号を「扶余」と定めた。

聖明王は日本に仏教を伝え、それと交換に援軍派遣を期待したようである。当時の仏教は後世や国民の安楽でなく富国強兵の妙法であった。その秘訣を日本に伝え公開したことになる。

660年、唐国と新羅が百済を本格的に攻撃しはじめ、唐国の將軍蘇定方と新羅の名將金庾信が連合し百済に決定的な打撃を与えた。韓国の『三国史記』の記録によればこの時に「百済の將軍や決死隊の勇士5000人が全員戦死」と記録されている。さらに残兵も白村江の河口で唐国の水軍に完敗してしまった。これが韓国で有名な物語である宮女3000人が身を投げた白馬江落花岩の絶壁の話になったようである。

その後、義慈王とその一族は唐国に降伏したが百済の残兵たちは頑強に抵抗した。百済は覺徒という僧侶を使者として日本に送り百済の敗北を伝えた。また、10月に壬存城を守っていた鬼室福信（武王の甥）が日本の中大兄皇子（後の天智天皇）に使者を送った。

631年から約30年間日本にいた義慈の皇子扶余豊（『日本書紀』では余璋）を帰国させ百済を再起させようと援軍を要請することになった。天智天皇はその翌年の8月に阿倍引田比羅夫などを百済救援に送ることを決め、武器と食糧を準備した。

狭井檳榔（サイノアジマサ）、秦田来津（ハタノタクツ）の兵5000人を百済に送った。662年5月阿曇比羅夫（アスミノヒラフ）などが軍船170隻をもって余豊を百済王として奉り百済に向けて出発した。

663年に27,000名の大軍を三軍に分けて攻撃したが白村江の河口で敗れてしまった。『三国史記』（百済本紀元）の記録によれば唐羅軍（唐と新羅）は済日軍（百済と日本）を全滅させ周留城（韓山）を占領してしまったのである。

（4）天智天皇と亡命渡来人

百済の義慈王とその一族は新羅と唐国に降伏し護送されてしまった。残留兵は最後まで周留城を守っていたが、百済を再起することが叶わず唐羅軍勢によって663年の周留城抗戦から10日目の9月7日に遂に城を奪われ敗れることになる。

百済王として奉った余豊も捕らえられて行き、残留日本軍は百済軍兵と一緒に日本に帰ることになる。白村江の戦いの後、日本に移住亡命することになった百済人の数は激増した。天智天皇を頼って多量に渡来している状況である。

亡命者の数は正確には分からないが非常に多い数だったことは確かである。665

年（天智天皇4年）には百済の男女400人余りが近江国神崎（カンザキ）郡に移住して来て畑を耕して過ごし、669年にも余自信、鬼室福信の一族である鬼室集斯など百済人2,000人余りが近江国蒲生郡地方に配置され、日野に鬼室神社を建立したという（『日本書記』）。集団としては最大の渡来と思われる。

百済が滅んだ5年後に高句麗も滅ぶことになる（天智天皇7年）。高句麗人たちは蝦夷対策として関東地方に配置され、716年元正天皇に一括して武蔵に移り、埼玉県入間郡に高麗神社を建立することになる。関西地方では河内平野を中心に土師氏、漢氏など大陸から渡ってきた渡来人が多く暮らしている。

当時、渡来した集団は官位の高い人たちの亡命であり、教養や学識があり技能を持った者が多かったと見るべきである。後に法官大輔や学職頭に任命されており、兵法、医学、経書、陰陽道などに明るい人たちが亡命移住していたことが分かる。その後も、8世紀末まで渡来移住する人たちが絶えなかったという。

これらの人々の存在によって朝廷豪族の文化生活面における貴族文化は急速に進み、百済亡命者の知識や技術が多く影響したものと考えられる。後に大仏鑄造の技術指導に当たった国中公麻呂（クニナカキミマロ）の祖父はこの時百済から亡命して来た国骨富だった（774年統紀寶龜5年10月己巳条）。

こうした関係で亡命者の中には僧侶たちも多く、陰陽博士、医薬、音博士など最高級の知識人が多かったと思われる。日本の片仮名の発想も漢字による朝鮮語表記法の「吏読」を使っていた人たちの影響を受けて生まれたものと考えられる。

（5）吏読と日本文字片仮名

日本の文字片仮名（カタカナ）は794年の平安時代初期には漢文訓読に使用していた色々な字体があったが、院政時代に現行に近いものに整理されていった。漢字を真名と言ひ、その片方の字体（偏またはつくり）をとった片名（仮名、仮字）、換言すれば漢字の偏かつくりの片方を借りてもう片方は省略して作った漢字、即ち、真名の不完全を意味する「片仮名」を日本文字に代えて音節文字に作ったものといえる。後世、10世紀には平仮名（ひらがな）も成立し漢字と混用して使われた。

漢字を片仮名に変えた略字の例

漢	字	保	奴	止	江	呂
片	仮名略体字	ホ	ヌ	ト	エ	ロ
発	音	ho	nu	to	e	ro

(阿〜ア、伊〜イ、宇〜ウ、江〜エ、於〜オ)

(加〜カ、幾〜キ、久〜ク、介〜ケ、己〜コ)

漢字を吏読略体に変えた略字の例

漢	字	是	為	古	飛	尼	奴	尸
吏	読略体字	人	ソ	口	飞	ヒ	又	个
発	音	i	ha	ko	nar	ni	no	ra

こうして日本の片仮名成立の発想を考えると7世紀にあった白村江戦争で新羅・唐国連合軍に敗れ亡命することになった多くの百済渡来人が主体となって整理したものと考えられる。

この発想は恐らく渡来人たちが平安時代初期から万葉仮名を書くため簡略化して使った記号から思いついたもので、それが音節文字、大和文字になったものと考えられる。

この片仮名ができる前には僧侶たちが漢字を読むのに漢字の片方に目印をつけて読んでいたものである。韓国の吏読、口訣式の漢字借用表記法と同じ発想だといえる。

これらの点から吏読、郷歌などを使用していた百済の知識人たちが大量に関係があった天智天皇を頼って集団亡命し、朝廷でいろいろな方面に参画することになり、朝廷では特に、「学問所」をつくり鬼室集斯を中心に研究させこのような片仮名をつくり発展させたのではないかと考えられる。

上古時代に韓国も日本もともに固有の文字を持っていなかった。漢字漢文を学びそれによって生活の感情や意思を表現するようになった。意味を表現するよりも音を重要視する固有名詞を表記する方法を利用するようになった。この表記がだんだ

ん拡大されて漢字漢文の言語体系にはないが、両国だけにある形態要素の助詞とか語尾などを表記するようになり、この表記が韓国では吏読・郷札と呼ばれ、日本では万葉仮名と称するようになったようである。

吏読・郷札は漢字借用による韓国語の表記法である。漢字漢文の導入以後、相当期間の経験を積んだ後にこの吏読や郷札がつくられたと思われる。日本の片仮名も同じく近肖古王の時代(346~347年)に百済の学者・王仁が日本の要請により論語、千字文などの漢字漢文の古典を持って日本に渡ってきた後、約300余年の間漢字漢文が貴族や僧侶たちに普及し、7世紀頃の集団渡来系の人々によって、特に鬼室集斯らを中心に「学問所」等で研究されたものが万葉仮名に使われ、片仮名に発展したものと考えられる。

慶州の南山に591年に建立された新城碑の用例で見ると「南山新城作[○]節[○]如[○]法[○]以[○]作…」のような漢文体に「節、以」のような補語がある。

このような「誓記体」の文体に文法素を補充する方法が使われていたこの方法を「吏読」と呼んでいる。この表記方法は朝鮮朝初期まで発達して体系が整備され洗練されていって「大明律直解」の用例ハングルがつくられる(1443年)まで最も重要な表記方法として使われてきた。

「大明律直解の例」

本罪律[○]乙、依[○]良[○]施[○]行[○]為[○]齋[○]、身[○]体[○]良[○]中[○]、腫[○]処[○]有[○]去[○]等

上記の「乙」は目的格助詞(～を)

「依良」は副詞(～に従って)

「為齋」は(～したい)

「良中」は場所格助詞(～あれば)

「有去等」は(～あれば)

のように文法素をつけて読んでいた。

(6) 郷歌と日本最古の文献『万葉集』

663年唐羅連合軍(唐国と新羅)と済日(百済と日本)の戦争がなければ日本の

古文献である『万葉集』は出て来なかったであろうという（中西進『万葉集における古代朝鮮』）。『万葉集』には古代朝鮮の痕跡が多い。「カラ（韓、漢）」、「コマ（高麗）」、「クレ（呉）」のような言葉、地名、事例が多いのはいうまでもないが、風俗などの面でも古代朝鮮との関係が多く登場する。

『万葉集』は七世紀前半から編纂されたという。『万葉集』という書名の意味は多くの歌を集めたものを万代、万世まで伝える本だという。巻11の2682韓衣（からころも）君にうち着せ見まく…のように『万葉集』の歌の中で韓国と関係がある番号をざっと拾い上げると次の通りである。（ ）は原文

- 2-199 （狛釵）高麗釵
- 4-543 人麿の用いた句
- 4-569 （辛人之…）韓人の衣…
- 5-802 （宇利）瓜、朝鮮語と同源。（伊豆久）何処のクも朝鮮語と同源
- 5-804 腰、矢、鞍は朝鮮語と同源
- 5-884 （意保：斯久）麻田陽春作
- 5-885 麻田陽春の歌に謹んで唱歌する歌。筑前国守山上憶良
- 10-2278 （辛藍花之）韓藍の花
- 11-2090 （狛錦）高麗錦
- 11-2356 （狛錦）高麗錦
- 11-2406 （狛錦）高麗錦
- 11-2624 濃染の衣
- 11-2682 （辛衣）韓衣
- 12-2975 （高麗錦）高麗錦
- 14-3482 （可良許呂毛）韓衣
- 14-3465 （巨麻尔思吉）高麗錦
- 14-3555 （可良加治乃）韓楫の
- 16-3791 （狛錦）高麗錦
- 16-3885 （韓国の）韓国の

16-3886 (飛鳥尔到、置勿尔到、都久怒尔到)

このように韓国と関係が多いことが分かる。なぜ、これほど関係が多かったのか。『万葉集』は629～759年の約130年間の長歌、短歌、旋頭歌、仏足石歌などの4500首で、天皇から庶民まで約500人の歌人の作品が収録されたものである。

4500首のうち3分の1に当たる1800首は作者未詳の歌である。

旋頭歌は上3句と下3句が同じ五、七、七、の6句体形式になった和歌で、仏足石歌は31首の短歌の末音に7音を加えた形である。一字一音を万葉仮名で表記した。

郷歌の影響を受けたのは仏教的なものだといえ、短歌31音に末音7音を加える形式の上3句下3句の6句体形式で漢字を意味に関係なく表音文字で使った万葉仮名で表記した。郷歌もやはり漢字の音と訓を借りて表記したのと対照的である。

白村江戦争以降、倭(日本)に渡来した人たちが多かったということは前に触れたとおりである。朝廷に参画したことのある人たちは次の通りである。

軍政には、答本春初、四比忠勇、憶礼福留など、礼法には角福牟、沙室紹明、許率母など、医学には吉大尚などが知識を提供したと日本書記に記録されている。

『万葉集』は天智天皇朝廷隆盛の機運の中でつくりはじめられたものである。山上憶良(憶仁の息子)、吉田宣(吉大尚の息子)、麻田陽春(答本春初の息子)、栗浪河内(沙門詠の息子)、推野長年(四比福夫の後継ぎ)、余明軍(余自信の後継ぎ)、角麻呂(角福牟の後継ぎ)など、多くの亡命渡来人たちの後孫が活躍し和歌を継承させたということを記録から探し出すことができる。

韓国に「ユンノリ」という祝祭日によく遊ぶ大人から子供まで楽しむ「民族遊戯」がある。「擲柶」ともいうが、一種の双六風のゲームのような遊びである。小さい丸木を二つに割って作った四本一組の遊戯具を持って、組を分けて勝負を競う。

四本の「ユッ(木片)」を頭よりも高く投げ上げ、落ちた木片の仰向けと俯向け(表と裏)の出方によって一点から五点までの点数をつけ、四つの駒を進めるゲームである。四つの駒全部が出発点に早く戻った方が勝ちになる。

裏1枚、表3枚が1点で“ト”(豚)という。「三伏一向(起)」「(三つの木片は伏

せて一つの木片が上向きになる)。

裏2枚、表2枚が2点で“ケ”(犬)という。「二伏二向(起)」(二つの木片は伏せて二つの木片は上向きになる)。

裏3枚、表1枚が3点で“コロ”(鶏)という。「一伏三向(起)」(一つの木片は伏せて三つの木片は上向きになる)。

裏0枚、表4枚が4点で“ユッ”(牛)という。「全部四向(起)」(四つの木片すべてが上向き)。

裏4枚、表0枚が5点で“モ”(馬)という。「四伏全部」(四つの木片がすべて伏せる)。

この遊戯の一種が万葉集に歌われている。これは渡来系の人たちが残した痕跡であろう。日本に渡って来た渡来人が故郷を思いながら歌に残したのではないかと思われるが、万葉集「6-948」に「折目四」の説明で「雁の音」または「かりうち」と解釈されている。この「かりうち」は韓国の「ユンノリ」とはちょっと違うようだが「折木四」の木片を使っていることは同じである。

万葉集「6-948」(折木哭之)の説明によれば「雁の音」の意として次のように解釈している。檮蒲、四個の小木を薄く削り両辺を尖らせ杏仁を削いだ形にする。その半面を白く、半面は黒く塗り、白い方の二枚に雉を画き、黒い方の二枚に子牛を画き、それを投げてその采の色によって勝負をする。これを「かりうち」という、と書いてある。

万葉集「10-1874」(暮三伏一向夜)檮蒲(栖戯)で裏が1枚、表が3枚出た場合を「ツク」と解釈して(都久)「月」の字を当てている。この「月」の字を当てたのは「つける」という意味だが「タル」の韓国語訓読にあたる。

この「タル」は韓国語の固有語の「月」の字にもなる。日本語のお月さまの「月」を「ガツ」と読むのと同じである。

万葉集「10-1074」にも(此月者)と原文に書かれている「月」は「タル」の訓で、栖戯をする時に相手の駒がひと駒前後にあってつかまる可能性がある時には前に進まないで、駒をそのまま置いて「ト」(1点)のところにつけるということを

「タル」(月)、「タルア (つける)」と表現する。

「月」の字を当てて訓読みをし、日本語の「ツク」(付く) という「つける」の字を当てたのではないと思われる。

万葉集「12-2988」(末中一伏三起) 裏3枚、表1枚、一つの木片が伏せて三つの木片が上向きになっている場合を「コロ」といって「頃」の字を当てている。この場合は発音が殆ど近い韓国語の音で漢字の「頃」の訓読みで当てている。

万葉集「10-2131」(切木四之泣所聞) この場合も「6-948」と同じく「雁の音」と解釈表現している。

2 17世紀江戸時代の日本人の朝鮮語研究

(1) 新井白石の朝鮮語研究

1591年から1598年までの7年間にわたった壬辰倭乱(日本では文禄慶長の役)以来、両国ではお互いに「言語」を学ばなければならない必要性を切実に感じるようになった。

豊臣秀吉の死後、徳川家康は対馬島の守、宗義智と家臣である柳川調信に命じ朝鮮と和議を結ぶことにした。これまでの闘争をやめて平和と友好的な両国国交を希望するという交渉をすることにしたのである。しかし、平和交渉が実を結ぶまでに10年近くを要した。

当初、朝鮮は交渉に応じなかったが、徳川家康が壬辰倭乱で軍を率いて参戦して来なかっただけでなく、豊臣秀吉とは違う人物だということが分かり、ほぼ10年後の1607年に第1回の通信使(正式名称「回答兼刷還使」)を送ることにした。

韓日両国の修交回復によって日本の学者の関心は急激に朝鮮に向けられ、広まることになった。その後、韓国の通信使の渡日が継続することになり、交通も頻繁に往来できるようになった。こうして相互に言語を学習することになったのである。

歳月が経ち徳川幕府第6代将軍(1711年)の時には、「和親の本義をもって国家の威信を立てる和交」という厳粛な外交を行うことになった。これは当時徳川幕府の最高政治顧問だった新井白石の建議だったという。

新井白石は李退溪の朱子学の影響を受けた徳川幕府末葉の本格的な実学者だった。その当時、日本の儒学には三つの大きな流れがあったようである。その一つは貝原益軒、伊藤仁斉、石田梅巖などの心学派で、もう一つは国民の生活を道徳的に改良することによって社会を改善して行こうとする言ってみれば在野派である。これに対し新井白石のそれは個々の国民を啓蒙し、自分自身は政策決定する側にあって国の政治それ自体を改良することによって社会を正そうとするもので、即ち、権力層にあって、上から社会を改良すべきだという考え方の実権派的性格の持ち主だった。

新井白石は朝鮮語研究を必要と認め、雨森芳州と同じ漢学者である木下順庵の学塾で朝鮮語を学ぶことになった。朝鮮から来た使者たちと会ったとき新井白石が朝鮮語を使用しその使者たちをびっくりさせたこともあったという。そして新井白石と通信使の間で筆談した記録も残っている。

いずれにせよ、当時、新井白石の朝鮮語の語源研究の成果は非常に大きく、それ以外に朝鮮論も多少ある。

江戸時代の260年余りにわたる歴史的な背景をよく見ると朝鮮とは善隣関係を維持したといえる。朝鮮語に対する知識は不十分だったが、朝鮮語学習をはじめ語源語彙などに関する著書や研究が多く残っている。

(2) 『東雅』の語源研究

新井白石(1657~1725)の『東雅』の語源研究は、彼が朝鮮語を学習し終えた後の研究である。東雅の序文には次のように書いてある。

“韓地の諸國，그 나라사람들 日本에 많이오며 百濟의 博士등 各各 學問을 가지고 왔다. 太古로부터 今世에 까지 五方雅俗의 言語，바람과 함께 흘러오며 風俗과같이 건너와 海外諸國의 方言처럼 서로 혼합한것 같다. 지금 조선의 音韻學을 들으니 그나라는 낼수없는 音이 없고 助詞 反切의 묘점도 있고……”

これは「韓地の諸国、その国の人々日本に多く来て百済の博士など各々学問を持って来た太古から今世にまで五方雅俗の言語、風とともに流れ来て風俗と一緒に渡って来て、海外諸国の方言のようにお互いに混合したようだ。今、朝鮮の音韻学を

聞くと、その国では出せない音がなく助詞反切の妙点もあり……」。

『東雅』は巻1から巻20に編纂されており、天文、方位、神祈、祭祀具、人倫、宮室、器用（度量、楽器、宝貨、布帛）、冠履、帳御具、耕織、工匠、舟車、鞍轡、行旅（文具、武器）、雑器、飲食、穀蔬、樹竹、畜獣の順で編纂されている本である。これらのものに韓地の方言から出てきた言葉が多くあるとっている。

言語を羅列してみると理解できる。その代表的な言葉の幾つかを選んでここに紹介する。

까치 (鵲) かささぎ、新羅から来た。カシサワギ (噪)

나니와 기시이 와카베 도미
推古天皇の時難波吉士磐金 鵲2隻を献上

사발 (鈔羅) サフラ、新羅の義、(皿)

기와 (瓦) カハラ、百済の方言

곰 (熊) くま、百済の方言。倭名抄に神稻 (クマシネ)

からあい (韓藍)

からさを (連伽)

からすき (犁)

からうす (臼)

かぶと、よろひ (甲冑) 韓地 方言、甲の字から来たもの

ここにせし (居師干、世子) 百済から

ここにきし (王) 百済の方言、(居西干、居師金)

ほとけ (仏) 百済の方言、(浮フ図トから)

さし (城) 百済の方言

しま (島、洲) 朝鮮ではソムという

くも (거미) komi

うし (牛)

てら (寺)

こほり (郡)

たひ (鯛・道味^{ドミ})

たか（鷹）竹、高飛から

みそ（味噌）、高麗醬（醬日密祖）三韓の方言

ちょく（鍾）朝鮮の方言

かみ（紙）紙墨などつくる方法、高麗から伝わってきたもの、樹名：カウゾ

わた（海）韓地の方言 日本紀に海をホタイ

もり（杜）神社 イツキ 新羅のソシモリ（曾戸茂梨）

わうじん（王仁）百済のワニ（和邇）

ふみ（書）フミ「フミノオビト」書道などの祖 百済から

ぐわ（晝）推古天皇の時高麗僧曇徴の能作彩色及び紙墨

つるべ（釣瓶）두루박（ドルバク）

すりうす（ひき臼）、高麗僧・曇徴が挽き臼をつくる

以上のように新井白石の『東雅』には日本語と朝鮮語の間に存在する共同語源、方言、俗語方言の転成語など80語余りが調査研究されている。日本語には朝鮮語だと認められる言葉は昔から多くあり、また地理的に近いことから『日本紀』などに大陸から伝わって来ている言葉が非常に多いと新井白石は繰り返し言っている。彼はこの『東雅』に三韓方言、韓地方言、日本紀、百済方言、高麗方言、新羅方言などから出てきた言葉だとしながら語彙比較をして地方語別に立証対比している。日本語がこの時代朝鮮語のどんな言葉に該当するかについての研究に止まったが、この研究によって朝鮮語への関心が非常に高まり両国の言語を比較しながら広範囲に両国を論じた点については高く評価される。

当時の新井白石は歴史家、儒学者、詩人、政治外交家、経済家、地理学者、言語学者、それに加え日本の近世最大の国際人と評価できる。

彼は朝鮮古代の国が中国先進文化の中継地になり多くの渡来人が学問や技術を持って来て日本に文化的な貢献をしたという古代伝承を通じ朝鮮を文化的に敬慕していた。

徳川幕府の友好的な政策下で日本の儒者の間には朝鮮の学者文人に対する尊敬の

度が高かったようである。

(3) 雨森芳洲の朝鮮語研究

雨森芳洲(1668~1755)は1693年26歳の時、木下順庵先生の推薦で対馬藩の真文役として対馬島に赴任してから88歳で死去するまで朝鮮外交の第一線で活躍した。木下順庵は朝鮮通信使との交流を通じ朝鮮との交隣外交は「文」を中心にしなければならないことを知り、対朝鮮外交の窓口である対馬藩に自分の弟子である雨森芳洲のような優秀な人材を方佐役(真文役)に推薦したようである。

雨森芳洲はその当時日本にあって第一級の学者であり語学者、文人としてだけではなく思想家、外交家、教育者だった。雨森芳洲は「朝鮮と接触するためには、まず最初に朝鮮の人情と事情を知ることが緊要だ」と言い、自らが直接実行したようである。

1703年から3年間釜山の当時倭館に渡って朝鮮語を学んだ。彼はその時勉強したものを朝鮮語入門書として著わし『交隣須知』を編纂し、1729年には朝鮮の「人情」や「事情」を同時に学習できる『全一道人』という本を出した。

『交隣須知』は書名が表すように隣国である朝鮮と接触するのになくてはならない本、即ち朝鮮語会話の入門書である。これには天文、人品、官爵、果実、衣冠、売買など71項目があり、各項目毎にそれぞれ40~50の単語が漢字で書かれており、各単語の下に朝鮮語の短文と日本語訳がついている。単語の意味と用法を説明している一種の辞典形式になっている。

(4) 『交隣須知』—朝鮮語の会話入門書(朝鮮語教科書1703年、ハングルは現代文字)

「天」 하늘이 과연 청명 하되 (天ガ イカニモ アキラカニ ゴザル)

「雨」 비오다가 개니 초목이 빛나되 (アメガフッテハレタニヨリ草木ノイ
ロガテマスル)

「亡」 도망하난놈을 잡거든 죽이자 (ニゲタモノヲ ツカマエタラ コロソ
ウ)

- 「負」 지면 죄랄 님사니라 (マクレハ ツミヲ コウムル)
- 「文」 글을 잘하여야 급테 하기쉽사오니 (ブンヲヨウカイテコソ 及第スル ガヤスウコサリマス)
- 「臼」 덜구의 쌀을 붓고 떠흐리 (ツキウステ コメラ ウッ테 ツ케이)
- 「香炉」 향노의 향피어 노하라 (コロニ コウヲ タイテ スエイ)
- 「靴」 목회난 일본은 업삼서 (フカクツハ 日本ハナイ)
- 「五月」 오월은 단오 잇고 (五月ハ 端午ガアル)
- 「六月」 뉴월의 뉴두잇고 (六月ニハ 流頭ガアル)
- 「十一月」 동지달은 동지잇삼네 (十一月ハ 冬至ガゴザリマスル)
- 「十二月」 섯달금음날은 빗을 잡고 밧기랄 하기에 큰상고들은 잠자지 못하압네 (シワス ミソカハ 借銀ノ トリヤリヲ スルニヨリ 大商人トモハ 夜ヲ ネヘマセヌ)

これらの用例も高い水準のもので、朝鮮文字を読むだけでなく発音ができる人が勉強できるようになっている。

(5) 『全一道人』—朝鮮語の学習書

日本における最古の朝鮮語学習書の一つが雨森芳洲の自筆稿本『全一道人』である。この学習書は雨森芳洲が生まれた滋賀県伊香郡高月町雨森区の芳洲書院に保存されている。

この『全一道人』の内容は中国の教訓書をハングルに訳したものを芳洲が一字一字日本語に訳し、そのハングルの音を日本語の片仮名で書いたものである。その片仮名の部分が朝鮮語音韻史に参考になると考えられる。

『全一道人』の「至孝繼母」編 (1729年) に

“진시절의. 왕연이라하난사람이. 아홉사래. 어미랄. 여희고. 읍혈. 눈물나기랄 삼년을하야. 거의. 명이. 진하기에. 니르더라. 그제모. 변시. ………”

「妻」 안해 (アナイ)

「運米官」 운미관 (ウルミグワン)

「公作米」 공작미 (ゴグザグミ) 「책에는 “작”이 “착”으로 되어있음」

「死」 죽엇난지라 (ツコンノンチラ)

「殺」 죽엇난지라 (ツキヨンノンチラ)

「鵲在樹枝上俯窺茄子欲持而去之耶」

(가치나모가지우해서가지를 그비이어보니가치코가려하난가) などとある。

雨森芳洲の朝鮮観には朝鮮出兵の壬辰倭乱が道理に反した侵略で、それが両国の人民に多大な損害を与えたという基本認識があり、芳洲の戦争と平和に関する人道主義的な態度は最も近い国である朝鮮と親密に過ごせたのは「仁」の思想で儒教の最高の徳であり、「仁」の発現だと言っている。彼は対馬藩の一人として日本を代表し朝鮮と外交折衝の責任を負い、両国の慣習、法制、文化などの違いから来る軌轢に細心の注意を払った。

この点でも相手を知り、各民族の平等を主張するため朝鮮語の教科書をつくり、朝鮮語通訳の養成のため学校や教育体系をつくった。彼は通訳に対しても公務員としての自覚を持たせ、通訳が単なる言語の技術者に留まらず学問と教養を積み相手国の事情や慣例に通じるようそれを必須条件に掲げている。

結 言

日本の古代史を見ると韓日関係は東アジアから孤立して存在したことはなかった。海の道や風の道に乗って渡来した痕跡も多く、それに加え時代的に朝鮮三国時代の戦乱もあり、渡来人が多く日本に渡って来たといえる。

4世紀末から、6世紀までの渡来人は朝廷に登用される者が多く、官人として地位が高く有力な豪族の支配下にあって文字の発達普及や技術、養蚕、織物などに従事したようである、7世紀後半の百濟からの亡命渡来人たちは豪族と同じ朝廷や行政の頭脳として従事し、地方に居住し各分野に貢献し、その後引き続き高句麗、新羅などから渡来した者たちも地方に配置され、その地方の土地開発、産業開発や文物の発展に努めて来た。

「馬牛」 (モシヨ)

「姑」 쉬어미 (スエミ)

特に7世紀には百済の白村江の敗戦と滅亡に次いで唐と新羅によって百済が滅び、その5年後にやはり唐と新羅によって高句麗も滅ぼされ、集团的に日本に移住渡来することになった。この渡来人たちが持って来た文化は多種多様であったが、その中でも言語文化に見られるように「渡来語」を見ても日本文字「片仮名」誕生の発想は吏読文字や口訣を使用した渡来人の協力によって得られたものと見ることができる。

万葉仮名は郷札式であり、和歌の作者も渡来人が多いと思われ渡来人が故国や故郷を偲んで歌った歌として郷歌のようなものを継承したもので、7世紀から異国の地で続けられたのではないかと考えられる。特に、9世紀に片仮名が整理完成されたことから見ても、時代的にもピッタリ合う。

万葉集の歌の中に作者や地名が韓国と関係のあるものや、現在までも日本に残っている昔の韓国関連の地名が多く使用、記録されているのを見ても日本と韓国は深い関係にあることがよく分かる。

第2章で説明したように17世紀に於ける朝鮮語研究が新井白石や雨森芳洲によって進められ、いくつかの例を挙げて渡来語を確証した。

参考までに『日本における朝鮮語関連地名(1~4)』を添付した。昔の韓国の地名がこれほど多く残っているのは明らかに渡来人たちが残したものであり、「渡来語」が現存していることを裏付けている。

〈日本に存在する朝鮮関連地名〉—1

地	名	所 在 地
唐国 (カラクニ)、唐国村		大阪・和泉
辛国池 (カラクニノイゲ)		大阪・摂津
韓人池 (カラコノイケ)、唐人地、唐古		奈良・大和
唐橋、辛橋		京都・山城
唐物町		大阪・摂津

唐埼、可楽埼、韓埼	滋賀・近江
辛之崎、辛浦、犬カラ	山口・硯
唐橋、韓橋、辛橋	滋賀・近江
唐城郷	静岡、遠江
辛科郷（カラシナノサト）、韓級（カラシナ）	群馬・上野
唐ヶ原（モロコシガハラ）	神奈川・相模
辛犬郷（カライヌノサキ）	長野・信濃
唐子村、唐子橋、上唐子、下唐子	埼玉・武蔵
辛山郷	千葉・下総
韓濱、辛室郷	兵庫・播磨
韓泊、韓荷嶋（コノシマ）、辛荷島	兵庫・播磨
辛島郷	千葉・下総

〈日本に存在する朝鮮関連地名〉—2

地	名	所在地
韓良郷、韓泊、唐泊、韓亭、可良浦、辛家		福岡・筑前
加唐島（カカラシマ）		佐賀・肥前
辛家郷		熊本・肥後
韓ノ埼		長崎・対馬
韓国嶽、空国嶽		宮崎・大隅
唐人町		鹿児島・薩摩
唐人町		高知・土佐、佐賀・肥前
百済郡（クダラノコホリ）、百済、百済川、百済町、百済野		大阪・摂津
百済ノ郷		大阪・河内
百済村、百済		大阪・和泉
百済川、百済、百済池、百済村		奈良・大和
百済野、百済原、百済村		奈良・大和
百済寺		滋賀・近江
百済来、久多良来、久多良来村		熊本・肥後
百済庄		群馬・上野
新羅郡（シラキノコホリ）、白子村、新坐郡（ニヒクラ、シンザ）、志木、之良岐、志楽、高麗郡、高麗郷、高麗川、高麗峠		埼玉・武蔵野

〈日本に存在する朝鮮関連地名〉—3

地	名	所 在 地
白国、新羅訓村		兵庫・播磨
志楽郡、設楽庄（シラク）		京都・丹後
志楽郷、志木、白子、四楽村		埼玉・武蔵
新羅郷		宮城・陸前
白木浦、白鬼女川（シラキニョ）		福井・越前
白城駅		富山・越中
白木村		石川・加賀
新羅浦、新羅邑		岡山・備前
白木山駅、真良郷（シンラノサト）		広島・安芸
白木、新羅来、白木平（シラキタヒラ）		熊本・肥後
白木村		石川・加賀、三重・伊勢、福岡・筑後、大阪・河内
巨麻郷（コマノサト）		大阪・河内
高麗（カウライ）		大阪・摂津
大狛郷、高麗（コマ）村、上狛（カミコマ）村、狛（コマ）寺		京都・山城
狛山、下狛郷、狛野庄、狛山、狛渡		京都・山城

〈日本に存在する朝鮮関連地名〉—4

地	名	所 在 地
胡麻駅、胡麻郷村、胡麻牧		京都・山城
高麗山、高麗寺山		神奈川・相模
巨麻郡、駒井村、駒ヶ嶽、北巨麻郡、南巨麻郡		山梨・甲斐
小間子原（コマコノハラ）		千葉・武蔵
高麗山、高麗村		鳥取・伯耆
高来寺村		福岡・筑前
朝鮮ガ嶽		奈良・大和
狛江郷、狛江村		東京・武蔵

資料：朝鮮総督府中枢院（昭和15年）

大日本地名辞典（吉田東伍）

〈参考文献〉

- 日本書記（上下） 岩波書店
 万葉集（1～4） 岩波書店
 万葉集 木俣 修 日本放送出版協会
 帰化人 木俣 修 日本放送出版協会
 帰化人 関 晃 日本歴史新書
 近江 水野正好編 吉川弘文館
 白村江 鈴木 治 学生社
 渡来人と渡来文化 金 達寿 河出書房新社
 日本と朝鮮の古代史 吉田 晶 外 三省堂
 新井白石全集 弘文館
 新井白石序論 宮崎道生 吉川弘文館
 交隣須知 京都大学文学部編
 全一道人の研究 京都大学文学部編
 飛鳥 門脇禎二 日本放送出版協会
 「万葉集」における古代朝鮮 中西 進 往来社
 記紀万葉の朝鮮語 金 思燁 六興出版
 郷歌 全 圭泰 正音社
 吏読集成 朝鮮総督府中枢院
 郷歌及び吏読の研究 亜細亜文化社
 百濟語研究 都 守熙 亜細亜文化社
 万葉集歌の原型 姜 吉云 三五館
 百濟の歴史と文化 俞 元載編著 学研文化社
 郷歌と万葉集の比較研究 宋 哲来 乙酉文化社
 郷歌と万葉集の表記法比較研究 李 鍾徹 集文堂
 日本における朝鮮語の研究 柳 尚熙 成甲書房
 古代朝鮮語と日本語 金 思燁 講談社
 日本語をさかのぼる 大野 晋 岩波新書
 日本史に生きた渡来人たち 段 尚麟 松籟社
 渡来人と古代日本 上田正昭 河出書房新社
 渡来人は何をもたらしたか 新人物往来社
 渡来人の系譜 井上秀雄 新人物往来社

〈Korean words mingled in Japanese〉

1. People and the language which came to Japan from the Korean Peninsula
 - 1) History of the people who came to Japan from Korea and the naturalized people
 - 2) The Asuka age and Paekche
 - 3) The Hakusukinoe War and Japanese reinforcements
 - 4) The emperor Tenchi and exiled Koreans
 - 5) Yidu and Japanese Katakana
 - 6) Hyangga and the oldest Japanese literature "Manyoshu"
2. Research of the Korean language by Japanese people in 17C (Edo ege)
 - 1) The research of the Korean language by Arai Hakuseki
 - 2) The etymological research in "Toga"
 - 3) The Korean language research by Amenomori Hoshu
 - 4) The introduction to Korean conversation "Korinsuchi"
 - 5) The study guide "Zenichidojin"

Japan and Korea are very near to each other. In ancient times a lot of people came from Korea to Japan. They brought many words including place names with them and the Japanese people still use these words. This article is about those words in the Japanese language brought by people who had come from ancient Korea and about the studies of the Korean Language by Arai Hakuseki and Amenomori Hoshu.

I think that Katakana was made in co-operation with those people from Korea by using the method of borrowing Chinese characters known as Yidu or Kugyol. Many of the writers of Manyoshu are considered to be people from Korea and Manyogana could also be made by the method known as Hyangchal.

Nishogakusha Univ. Japan

Prof. Sang Hee, Ryu